

---

# **赤の原作破壊者、青の傍観者もどき**

迷猫ちーず & 菜歌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤の原作破壊者、青の傍観者もどき

### 【Zコード】

Z5250BA

### 【作者名】

迷猫ちーず&菜歌

### 【あらすじ】

ある所に、一人の少女が居た。

彼女達は、当然のような、ごく普通の生活を楽しんでいた。

今日も一人で、楽しく平凡な毎日を享受していた。

…はずだつたのだが。

突然現れた自称「神様」に、別の世界にトリップさせられてしまつた！

これは、そんな二人のお話です。

所謂トリップ夢小説というものです。

迷猫ちーずと菜歌の一人で書いていきます。

…とっても気紛れ残念更新です。

視点をページごとに切り替えつつ書いていきます

赤 智香視点 青 夕里視点 で進めていきます。

智香視点を迷猫ちーずが書き、夕里視点を菜歌が書いていきますよ。

ちなみに、夕里視点の話以外の粗筋とかは全部迷猫ちーずが書いてます。

## 人物設定

### オリキヤラ設定

（隨時追加：なんか増えすぎて困つてる。）

雨宮 智香（あまみや ちか）

元気な天然系？軽く電波な女の子。基本的にはいい子。口調は大体の場合

「うだね！」「うだよ！」とか、明るくて幼い感じ。

トリップ先での姿は、茜色の髪、瞳に、猫口。

愛され体质。でもって愛し体质（？）

優しい人は大体好きだし、面白い人はもっと好き。

普段はさして強いわけではないが、キレた時の力は最強。そうなると凄く怖い

でも、とてつもない鈍感な上、自分が何されても（ちょっとかいかけられようが、殺されかけようが）全く怒らない。

なので、怒らせたい場合は、彼女の友人（特に夕里）を狙う必要がある。

しかしそこまでして怒らせてもしようがない。

夕里のことをゆーちゃんと呼ぶ。原作知識は大体ない。

神様の相手をするのは楽しいし、面白いから好き。でも、夕里が怒るなら、一緒に怒る。

百合じゃないよ！お友達だよ Friend だよ。

実はいわゆる天才児。ただし理系に限る。

国語や英語は苦手。ただ暗記は得意なので、一応できる。ただ、めちゃくちゃ模範解答になる。答え見たんじゃないからくらい。  
得意教科、数学、理科、社会、技術、音楽、家庭科  
苦手教科、国語、英語、保健

天堂 タリ  
てんどう ゆうり

菜歌が書く方の主人公

無表情でクールなかつこいいミステリアス少女。

・・・と見せかけて内心喋りまくり、慌てまくりのパニック少女。口調は「うだ」とか、男っぽい。

心の声が煩い。

トリップ先での容姿は長身に、オリエンタルブルーの髪と青い瞳。無表情なので、内面を知らない人にとっても怖がられる。が、知っている人にはとても微笑ましく見える。

英語・国語は凄いできる。100点も取れる。

でも他が出来ないのが恥ずかしいので、わざと白紙で出して「自分はどんな教科もやる気が無い」を演出中。

普段からとても強い。そして結構怒りっぽい。

でも、智香のキレたとき程は強くない。智香がキレたら速攻逃げようとする。

智香のことは普通に智香と呼ぶ。原作知識あり。

神様に対しても非常に非情。淡白過ぎる！

得意教科 英語、国語、家庭科、体育

苦手教科 数学、理科、社会、音楽（やる気ナシ）

ちなみに、二人とも一人暮らしだったたり。

で、二人とも家ごとトリップしてます。

自分で料理してたり繕つたりするから家庭科は得意な方に入つてます。

しかし、縫い物するゆーちゃんが想像出来ん……！

神様

残念なイケメン。アホ。

神と魔族のハーフで銀髪に赤い瞳。やべえ中一くせえwwwなんだ  
こいつwww

「う見えてなかなか偉いやつなので、好きなようにやつてい。  
ヘタレ野郎。しかも痛い！」

しかし、実は凄く強い。

頭が使えないじゃなくて頭を使わない。だから阿呆。馬鹿ではない。  
名前が不明。智香からはおにーさんだったり、かみさまだったり。  
ゆーちゃんは、コイツとかお前としか呼んであげない。冷たい！  
でも、まあ、無関心よりはマシだと思いたい。

多分一番扱いがひどいキャラ。なかなかに空氣。  
でも大体こいつのせいなので、自業自得。仕方ないね！

赤　〇話前半 もて、トリップつかねりしげ（前書き）

智香視点です。

## 赤〇話題半丸、アリ、トコシツアカルハリシニガ

「ひひひひひ、ひひひひひ。密室智香。エリエでもこる普通の女のナなんだよ。今はね、なんと、私の友達のやーちゃん」と天堂夕里ちゃんの家に来てるのです！

やーちゃん、結構この事に淡白だから、やーちゃんの部屋に西田麗香と一緒にいて、すつしにうれしこだだ！

「やーちゃん、やーちゃん、遊びよー。」  
やーちゃん、やーちゃんの手を手で張つてみる。

「ちゅうと待て智香。少しは落ち着け。」  
クールに、ふつかひせりひに彼女は叫ぶ。

「智香、ちゅうと待つてくれ。」

「ん、分かった！」

やつぱりいつわやんせつと手を放す。

するとやーちゃんは慣れた手つきでそれを髪を纏つて黒いキャップを後ろ向きに被つた。

黒いトーシャツ、向の加工も無いジーンズ。

やーちゃんはこつむこな格好。

とか思ひつつも、普通の青いトーシャツパンツの///

スカート。

つてこうすつじーラフなファッショングで、髪も全く縛つてないから、むしろやーちゃんより駄目かもね。

なーんてどうでもいいことを考えてみちゃつたり。か比べて何になるんだよ！みたいな。

「よし行くか。で、どこに行くんだ?」「うつちやんは考えることが脱線しがちだなあー。仕方ないね!」

髪を縛り終えたゆーちゃんは全く表情を変えずに「うちを見て尋ねる。

「んー？勿論ノープランだよー。特に行く場所なんて考えてないから、ゆーちゃんが決めてよねー！」

ゆ一ちゃんは、「やつぱりか…」って若干呆れた顔で向ひ一つを見た。

ゆーちゃんの表情の変化なんて、きっとひひひちゃん位にしか分かんないんだろうなあー。

えへ、ちょっと優越感だね。

「まあ、まあせめて散歩でもしようつが。」

とっても無難な答えが返ってくる。でも、うつちゃんは何も考えてないから、そつちゆりはマシかなーなんて。

「うん！了解しましたー！」

そう言つて、ひづちやんは部屋のドアを蹴飛ばすくらいの勢いで外に

走り出した。

と、出かけたのよここんだナビ…。

「あれ? もーちやんビリ行つたのかなー?」

もしかしてヒーの歳でモーちやん迷子ー。あ、もしかして迷子なのつ  
つちやんの方?

だつた! ナビねはま。とつてもせわま。

辺りは真っ暗闇。あれれ、今お皿だつたは  
ず。はづー。もしかして「うつむきやん、つこに時間感覚が狂つちやつた?  
それで、迷子になつて、適当に歩いてるつまこ、夜になつてやつ  
たとか?

「えー。それにほん腹すこはないな。あ。」

「へー。不思議なこともあるもんだなあー。

あ、でもビリモー。モーちやんやお母やん、心配して探し  
回つてゐるさじやなこかな。

そしたら、見つけたもつたとき、モーとすりこ怒られんだろ  
うなあ。モーちやんが怒ると怖こもる。

なんて言い訳したらいいんだろ？…。うう…。

なんて、変なこと考えていると、自分の斜め上辺りから光が降つてきた。

その光を頼りに辺りを見渡してみると…。

「…って、智香？」

少し離れたところにいるのは、大好きな…

「ゆーちゃん！」

うつちゃんは急いで彼女の所に走つていった。

『ホン。』

「大丈夫か？智香。」

「うん、うつちゃんは大丈夫だよ！」

どうやらゆーちゃんも迷つてたみたい。うつちゃん一人迷つてた訳じゃなくて良かつた！

ゆーちゃんはああ見えてこういつ暗いところ苦手だから、一人で大丈夫だったのかな？

『おい。』

「ゆーちゃんこそ大丈夫だった？うつちゃん心配だったんだよ！」

『氣づけ！』

「ああ、勿論大丈夫だ。」

さつきから、三人目の声が聞こえる。「つちちゃん達一人しかいないのに。ああ、ついに耳までおかしくなっちゃったの私！」

『すいませーん。』

「というか、ijiは一体何処なんだ？見たこともない場所だが…」

そう言つてゆ一ちゃんは辺りを見回した。私も一緒になつて周りを見てみる…あれ？

「「誰ー？」」

「…ぐわつ」

そこには、めそめそと泣いている背の高いお兄さんがいた。

え？あ？誰？

えつと、多分表現はお兄さんで間違つてないはず！

黒色の綺麗な髪に、赤い目。絶対日本人じゃないよね。うん。赤目だし！

結構かつこいい顔をしている。これが所謂いけめんつて奴なんだね！

けど、やつぱりゆーちゃんには勝てないよねー。ゆーちゃんかっこいいし！

そもそも見て見たことも無いような良く分からぬ服を着ている。

んー。なんだろ？なんか、本とかに出てきてる神様みたいな？でも、神様だったらこんな風に泣かないよね。

あ、でも、随違つて随良つて言つて、そういう神様がいたつて良いよね！

んー、それ以前に神様つて現実にいるのかなあ。いふとせ悪つけど、こいつ見て見ることつてできるのかな？

「…、俺は神界族と魔界族のハーフ。  
世界の管理者。いわゆる神様と呼ばれる存在だ。」

えーと…これはどういうことなんだろう。

自分のことを神様つていうなんてびっくりだよー！

つていうかマジで服装の通りなのかよーみたいだ。

えっと…たしか、ゆーちゃんに言わせれば、  
これは所謂「ちゅーにぎょー」つて奴なのかな。

んー。よく分からぬいや。分かりませんごめんなさい。

「…ってえ信じてないなー俺は本当に神様なんだぞー！」

何だらう。たしか、推理小説とかじゃあ犯人は絶対自分は犯人じゃ

なこつて壱つよね。

まあ、セコせビビドモいいか。

「じゅあじゅあーー一面花畠にしてみせてよーー」

あー、うん神様なら、命を操ることとかできるんだよね？

だつたら、辺りを全部花畠にできたら、周りを生きていく植物でいっぱいに出来たら凄いんじゃないかな。

つていう、ひやんと理に適つたふかーに考えがあつて、

別に、ただうつちゃんが一面の花畠を見たかったとかじゃないからね！

いえー!めんなさい見たかつただけです。

あの神様なおーーさんもついたえてるし、おーーさんは呆れてるし、

あれ?これ結構氣まずい空氣?

…まあいか!

それにしてもおーーさん、汗かいてるけど、じいじさんな暑いかな?

「え…、花畠?  
あー、うん、よし、やつてやる。ひよつと待つてね…。」

心なしかおにーさんのテンションが下がつてゐる氣がした。

で、数分後

「出来ませんでしたーすみませんー。」

「やつぱりかー。」

すかさずゆーちゃんがツッコウをこれる。

あー。おにーさん、中学生相手にすみませんなんて。別にそんな構わないのに。」

つて、ゆーちゃん怒鳴つてゐる?

「あれ、ゆーちゃんが怒鳴るなんて珍しいんじゃない?」

これはホント。ゆーちゃんは感情を表に出さない人だから、初対面の相手に怒鳴つたりするなんて、とっても珍しい。

あー、でもゆーちゃん、怒つてゐなあ

「畠畠、ちゅうとこつこつ押されとこつれ。」

ゆーちゃんが感情を表に出して貰るのはうれしいんだけどなあ。

うつけちゃん、結構あるおにーさん好きだあ。

まあ、ゆーちゃん怒つてゐし、つちちゃんはゆーちゃんの味方だか

ゆーちゃんが何か言つたら、やつぱりやの通りにしなきやねー。

「了解だよーー。」

「ひつやんは、それはもう思っておつけておきましたー。」

数分経過へ

「本当にすこませんでした…（泣）」

「泣くな。」

ひつやんは、それじかのへたれ、みたいな田でおひーさんを見ている。

つていづか、結局のところ、このおひーさんが本当に神様なのが、証明できぬよ。

だめじやん。でもちよつとひーちゃんとの掛け合には面白かったや。案外仲良し？

「で、でも俺は神様なんだ…えっと、じゃあ証明するために異世界送つてやんよー。」

…異世界かあ。いいなあ。

でも、このおひーさん、案外適当っぽこから、変なとこ吹っ飛ばされただらびつよ。

つて、それ以前にまづ異世界にいけるかビックくわからんなこし。

あ、といふか、本当に行けた所でそいつのひで神様だからって勝手にやつていいのかな？

職権乱用？

「智香、どうしたの？」

「じゃー送つてよ、証明になるからねー。」

とつあえず、うひちゃんがこいつで許可したら、おにーさんは田をぱああと輝かせる。

ナニコレキラキラ輝いた田で見られてもうひちゃん困る。

で、ゆーひちゃんはうん、やっぱ表情変わんなーね。でも、はあ？  
へりこには見てくれてる？

とか考へてゐつた、おにーさんが田を閉じて、腕を振ったその瞬間、ぱっと世界が暗転して、急に景色が変わっていった。

赤〇話前半 もと、トリックプランが（後書き）

中途半端でページが切れます。  
…意味になつちやつた。

赤　〇話後半 もて、トリップしたらしいが（前書き）

智香視点です。

## 赤〇話後半 やで、トコシフしたらしげ

見えるのは、パステルカラーの壁。

その壁に囲まれて、私はふわふわのベッドに寝転んでいた。

周りの本棚には、色々な種類（漫画やゲームの攻略本から、哲学書や心理学の本まで）が

ずらりと、まあ一応整頓されて並んでいる。

薄い黄緑や、ピンク色のパステルカラーで統一された部屋。

紛れも無くひちやんの部屋。

ふわりと、白いカーテンが風に揺れる。

もしかして今の夢だったのかな。なんて思つ。

ずいぶんリアルだったなあ。ゆーひちやんの反応とか、お兄さんの仕草とか、まだ鮮明に覚えてる。

ゆめなんて普段はすぐ忘れちゃうのに。

やつこえば、今何時だひつと時計を見る。

あ、そここえば、たしかゆーひちやんとすと遊んでたんだつけ。

でもまだお昼。夕方にすりなつてない。

あれ。ゆーちゃんは何処にいったんだろう。  
とりあえず、閉まっているカーテンを開けよ。

窓に近づいて、カーテンを開ける。窓ガラスにうつむかせんの姿が…

あれ？おかしいな。慌てて鏡を持ってきて自分の姿を一度見。

あれ、おかしい。絶対おかしい。

いま鏡に映ってる「うつむかせん」は、絶対今までの「うつむかせん」じゃない。

どうかうつむかせん見ても、何度も見返しても、

鏡に映る「うつむかせん」は、シラートとモヤリロングともつかない髪は

赤い。夕日みたいに真っ赤な赤。夢で見たおにーさんと似ている色。

でも、暗さがない赤色。茜色って感じの色だね。

でもこれは…校則違反？じゃなくて、ありえないでしょ！

よく見れば（よく見なくても）田の色まで茜色になっている…

何で「んな」と云。

うつむかせんは、髪は中学生だし、校則違反だし、染める気も全然無い。ってかかるわけないよ！

あと、カラーコンタクトは田にモノを入れるなんてしないんじゃない！って人だから、持つてない。

とこりか、それ以前にそんなもの持つてないかい、寝ぼけでやつたとかそんなのはあつえない。いやまあ普通寝ぼけてやるのじなんてあつえないでしょ！

だけど、純日本人のうつむちゃんが生まれつきこんな髪と皿なわけがないじゃんか。

つまり、ここから導かれてやられる筈えせ…

「夢だけだー、夢じやなかつたーー！」

うつむちゃんの声は、そこまでぐくない部屋に無意味に虚しく反響した…。

そんな自分の変化にビックリしてると、更に物凄い不思議なものが目についた。

…隣の家、確かにこんな屋根の色じやなかつたと思ひただけど。

この色、凄く見覚えがある。

ゆーちゃんの家の屋根！

つむちゃんの家からゆーちゃんの家まで一応1・5kmあるんだって！

何でゆーちゃんの家が隣にあるのー？

…やつこえざ、ゆーちゃんはどひつたんだわ。

うつむちゃんの見た目がどう見ても日本人じゃないって感じたそれは

もう赤くなつてゐるけど、ゆーちゃんは？

まさかゆーちゃんも赤つて事はないよね？  
だってゆーちゃんに赤はあんまり似合わないよ。

個人的に寒色の…まあ青がいいかなー？  
つて変わつてたら日常生活で困るでしょ！  
変わつてないのが一番なんだけど！

…せつかく近くなつたことだし、直接会つて確かめよう！  
うん。それが一番いいよね！

赤　〇話後半 もて、トリップしたらしいが（後書き）

また中途半端です。

何処にトリップしたのかわからないのは、  
何処に行つたのか考えてなかつたからです。てへ。

青　〇話 「「誰ー?」」 「...ぐわ」 (前書き)

夕里視点です。  
菜歌が書いてます。

青　〇話 「「誰ー?」」「…ぐあ」

「うちには天堂タリ。

普通に中学校に通っている一般人だ。

うちの家に遊びに来ているのは友人の雨宮智香。

因みに怒るとものすゞく怖い。

「ゆーちゃんゆーちゃん、遊ぼうよ」

「ちよつと待て智香。少しばらく着け」

智香に腕を引っ張られているんだが…マジで痛いんだ！

内心涙目だが表には全くと言つていいほど出ない。

心情を悟られないといつぱんではいいが、不便なほうが多い気がする。

「智香、ちよつと待つてくれ」

と一応声をかけるがいつものことだし時間はとらない。

でも親しき仲にも礼儀ありといつも言葉がある。

「つかせ」の言葉が好きだ。だから少しのことでも智香にまひといふ  
言ひ方と云つてゐる。

「ん、分かった！」

と了承を得てすぐに髪を後ろに一本に縛つて黒のキャップを後ろ向  
きにかぶる。

服は黒のTシャツにジーパン、つけのこつもの服だ。

女らしさがないのは気にしないでほしい。

うちはそういうのは着たくないからだ。かなり個人的な理由。

でも服なんてそんなもんだわ。

「よし、行くか。で、どこに行くんだ？」

うちに遊びつと持ちかけてきたのは智香だが、つかの予想が正しか  
れば…

「んー？勿論ノ プランだよ。特に行きたい場所なんて考えてな  
いから、ゆちゃんが決めてよねー！」

やつぱりか…智香らしいが、向こうから誘つてきたのだからそれくらこ離れてほし。

でも、それを言つたとこで智香が変わるとも思えない。

こしても…どうがいいんだりつか。

うちは行きたことこのなんてないし、なるべく智香の喜びやうなところがいいんだが…

……。わ、わからん…どうよ。

し、仕方ない。

「まあ、まずは散歩でもしようか」

無難すぎるが、本当に思いつかなかつたんだー！

それくらいは許してほし。

「うそー」解しましたー！

その笑顔で智香は言つて、智香はうちの部屋のドアを蹴飛ばしへんな勢いで出て行つた。

……結果オーライ？

出かけたのは良かったが、そのあとで智香の姿が見えないと思った  
ら、いつの間にかよくわからないところにしつちはいた。

「…どこだ？」

辺りは真っ暗。

智香どころか、何も見えない。

はつきり言つて智香もいないし、真っ暗な空間に一人きりつて、怖  
い。

何処までも続く、黒、という色の表現は適切では無いように思える、  
夜の闇よりも深い暗闇。

…ずっといたら気が狂いそうだ。

自分が立っているのかすら分からなくなりそう。

つらつらと考へていると、永遠に続きそうな暗闇に光が差した。

その光はスポットライトの様に自分とあと一人の人物…

「…つて、智香？」

暗闇に慣れていたせいですぐには分からなかつたが、その人物は智香だつた。

うちは智香の無事を知つてほつと胸を撫で下ろす。

「ゆーちゃん！」

智香もうちに気付いたのか走り寄つてきた。

『ゴホン』

「大丈夫か？智香」

「うん、うつちゃんは大丈夫だよ！」

確かに智香は平氣だらう。

お化け屋敷は平氣だし、智香はその持前の天然さで向けられている悪意にさえ気付かないような奴だ。

もつとも、智香はうつと違つて悪意を向けられることはほとんどない。

むしろ善意を向けられて友達になるのが智香だ。

『おい』

「ゆちゃんこそ大丈夫だった？　うつちゃん心配だったんだよ。」

『氣づけー』

「ああ、勿論大丈夫だ」

何故か、さつきからいつもでも智香でもない声が聞こえる。

うちの聴覚が狂ったのか？ 幻聴？ …まあいいや。

『すいませーん』

「といふか、ここは一体何処なんだ？ 見たこともない場所だが…」

そう言つてうちはあたりを見回してみた。

そしたら…

「誰…？」

「…ぐすり」

そこにはめぞめぞと泣いている背が高い男がいた。

だ、誰だっ！？

黒髪に赤の瞳。顔は整っていて服装は見たことのない衣。あえて言うなら神話に出てきそうな…

って、は？

いやいやいや、それはありえないだろう、神様なんているわけがないし、もしくはとしてめそめそと泣いているなんて、

…情けなさ過ぎる。

「…っ、俺は神界族と魔界族のハーフ。世界の管理者。いわゆる神様と呼ばれる存在だ。」

…え、本当に？

ただ単に頭がアレな痛い奴じゃないのか？

「ぜつてえ信じてないな！俺は本当に神様なんだぞ！」

なんか、うざい。

でも俺は なんだぞって自慢する人ほど弱かつたりすんだよな。

「じゅあじゅあ、一回花畠してみせてよー。」

「なんで花畠？」

「なんで神様の証明に花畠？」

自称神様もうひたえてるよ。やつややつだよ。

いきなり花畠作れって言われてはいわかりましたって作るわけないだろ。

つーか、冷や汗かいてるし、本当に出来るのか？

「え…、花畠？あー、うそ、よし、やつてやる。ちよつと待つてろ…。」

数分後 …

「出来ませんでした！すみません！」

「やつぱりかー！」

やつぱり出来なかつたみたいだ。最初から嫌な予感したんだが。

ただうひらは時間を浪費しただけのようだ。

「あれ、 ゆーちゃんが怒鳴るなんて珍しいんじゃない？」

「ん？ ああ、 本当だ。

珍しいじゃなか、 初めてじゃないか？

こいつ、 人を怒らせる才能を持つてんじゃないか？

そんな才能これっぽっちも欲しくないが。

「智香、 ちよかにいつ押さえとこてくれ。」

でもやつぱ、 一回シバいてやらなことな。

「了解だよー！」

「本当にすこませんでした…（泣）」

「泣くな」

全く、鬱陶しい奴だ。なんだこのへたれ野郎。

結局神だつて証明出来てねえじゃねえか。

「で、でも俺は神様なんだ！…えっと、じゃあ証明するためには異世界送つてやんよ！」

…本当に何なんだこいつ。立ち直り早いし。

つてか異世界？

「智香、どうする？」

うちほ全くこの世界に執着してないし、何処に行つても同じだらうし。

でも智香は違う。

智香は友人がたくさんいるし、今の環境も気に入つてゐるだらうと思つて声をかけたが…

「じゃー送つてよ、証明になるからねー」

…あれ？

なんかあつたりすぎないか？

そう言われたへたれ（もうへたれでいいよな）は目をぱあああつ、と輝かせる。

そして目を閉じて腕を振ったと思つと、

視界が暗転。

- - - - -  
「ん…、あれ…？」

気がつくとうちはベットで寝ていた。起きてまわりを見回す。

ただただ白いシンプルなベット、その近くには漫画などの本が入った本棚。

壁紙は黒、天井も黒、床は市松柄のカーペット。

白や黒で統一された、モノクロの部屋。

つて、自分の部屋だ。

今のは白黒夢？それならばやけにリアルだったな。

あの自称神様を殴った感触はまだ残っているし、意識もはっきりしていた。

「なんか気になるな……」

どうしようか。そうだ、智香に聞いてみるか。

智香ならもしかしたらさつきのことが夢じゃないか聞いても知らないのだったら別にそれはそれでいいし、知ってるのならさつきのことが夢じゃないとわかる。

うちは少し頭の中を整理してから行こうと思つほど混乱していた。

だから、すぐに自分の異変に気付かなかつた。

青　〇話 「誰ー?」 「…ぐふう」 (後書き)

こひちは前後に分かれてません。あれ、不思議。  
私(迷猫ちーず)は話のまとめ方が下手なんだね!ww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5250ba/>

赤の原作破壊者、青の傍観者もどき

2012年1月14日16時52分発行